Ⅳ-157　景観運動にあらわれた景観観と景観の意味内容に関する分析
―――〈京都タワー問題〉を事例として―――

東京大学大学院 学生会員　伊東 孝

1. はじめに

昨年および一昨年にひき続き，空間の表象としての景観を，我々がどのように捕えているか，また我々研究者はどのようにそれを捕えなければならないかという景観認識論へ向けての一事例分析を紹介する。本稿では京都タワー問題に例をとり，運動の過程の中に現われた景観に対する考え方（景観観）の分析，景観の意味内容についての考察を概略している。

景観運動を考察する目的・意義およびそのための方法については拙稿[1]を参照してほしい。

2. 分析方法・目的・留意点

雑誌文献等の公けにされた資料を中心にkey-sentence analysisを行なっている。作業手順は，①まず資料を元にして運動経過図を作成し，運動経過の考察を行なう。②次に運動経過に現われた様々な主張を大きく反対側と賛成側とに分ける。③内容分析[2]を変形したkey-wordsまたはkey-sentence analysisを元にして景観観を抽出する。④各論者の類型化を行なう。

論者の主張をこのように分けるのは，京都タワー問題がマスコミでは京都タワー論争と呼ばれていたことにて起因している。この場合，賛成論者・反対論者の対立点は何であり，また何が問題とされたのかということ等が問題とされよう。また一方の側の見解でもその主張・強調点には相違があるのに対し，現実にはある処で結びついている。以上の諸点を明らかにするために，分析レベルを変えて検討している。

このような方法の問題点または留意しなければならないことは，①文献に現われたことしか扱かっていないことは当然のこととして，②それらの論者は，自己の主張を表現するレトリックに富んでおり且つマスコミ等の表現手段を有していることである。③意見主張なので景観に対する価値観が非常に鮮明に出ているとみなせること，そして④それは政治的効果をも含めて検討する必要があることである。

3. 「運動の展開過程」からみた景観観の分析結果
*表-1参照

i）〈京都タワー完成以前〉

この問題が京都タワー論争といわれていることは2で述べた。しかしこれは現実的にそまた理念形の論争（ある論点をめぐって賛否両論に展開される二極対立の論争をこゝでは理念形の論争と考えている）としても考察できない。例えばタワー反対側と賛成側との主張には，論点または強調点に大きなズレがあったと言える。つまりタワー反対論者の〝タワーの是非〟〝タワーの位置〟という一般的なかつ基本的な問題設定に対して，賛成側は，この一般論を抜きにして，言いかえれば京都タワーが建てられることを前提にして（このことは，京都にタワーを建設することを是認し，かつ北口駅前というタワーの建設位置を是認していることを意味している），自己の主張をしているのである。また現実にも，設計者および当事者が何の発言をしてないことが，論争としての性格を弱めていることは否めない事実である。

ii）〈京都タワー完成以後〉

大きな相違は，タワー賞賛論者が主にタワーのシンボル性を強調するのに対し，タワー批判論者は，建設されたタワーとビルとのプロポーションの問題，異和感の指摘など，建造物に批判の焦点を絞っている。

この点に関してiii）〈完成前と以後〉とを比較してみると，興味ある問題を指摘できる。タワー反対論者とタワー賛成側（京都タワー賛成論者と京都タワー賞賛論者）との空間意味内容の相違をみると，タワー反対論者は，タワーが古都のイメージを破壊するとして，タワーと全体との関係性を強調するのに対し，賛成側は，タワーの持つシンボル性を強調している。つまり全体との関係性を重視する見方と，個を重視する見方との差になって現われていることを指摘できる。それが，タワーが完成すると，タワー反対側の〝京都タワー批判論者〟は，ビルとタワーとが一体となった建造

物またはタワーと駅前広場との関係性に批判を向けているのに対し，賛成側はまとして遠くから見えるタワーの視覚的シンボル性を強調する見解となっていることを指摘できる。つまりタワー賛成側はその主張の論拠を変えていないが，反対側では，主張の論拠が古都のイメージ破壊という空間的意味内容から，タワーとの関係性の批判へと，その論点が変わってきている。その理由を考えると，タワー反対論者にとってタワーが古都のイメージを破壊するのは，完成前から明らかだったことであり，そのことについて新ためて強調する必要はない。そして実際に構造物が完成した時，古都のイメージ破壊を前提としながら新たによくない点を指摘することは，批判する上で考えられる当然の手段であろう。

iv）〈全体として〉

全体を眺めてみる時，反対側と賛成側とではとりあげる理由や論点がその立場によって決まってくるという推測が可能である。例えばタワーの完成前にみられるタワー是非論，タワー位置論を考慮するか否か，空間意味にしてもタワーと全体との関係性を強調する見解と，仏としての独立性を強調する見解，反対側はタワーのシンボル性を全くとりあげないこと（勿論逆の意味でとりあげることも可能であるが），賛成側にみるタワーデザインの強調などを，指摘できよう。

4. 景観の意味内容の検討

タワー賛成側に共通する理由として，タワーのシンボル性を指摘した。ここではその相違をみている。シンボル性の種類とシンボルの意味内容によって，表-2のように整理できる。

表-1 各論者の類型化とその景観観

時期	タワー完成前									タワー完成後					
類型	タワー反対論者						賛成論者		反対論者	賛成タワー管理機関			京都タワー設計機関		
氏名番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
景観観																			
タワー是非論	○	○	◎	○				◎				◎						◎	
タワー位置論					◎	◎	○	○					○			○			
タワーデザイン論			○							○	○			○	○				○
タワーとの関係性 タワーとビル																	○	○	○
〃 駅広					○	○			○								○		
〃 町並					○	○													
〃 新幹線													◎						
宗教的意味 タワーのシンボル性										○	○	○	○	○	○		○		
古都のイメージ			○		○			○	○				○	○					

◎ 主要な景観観

1. 高地　純：建築ジャーナリスト
2. 大佛次郎：作家
3. 西山卯三：京大教授
4. 加藤周一：評論家
5. 神代雄一郎：建築ジャーナリスト
6. 浜口隆一：〃
7. J.P. オレコルス：ノートルダム女子大講師
8. 京都を愛する会
9. 井上吉次郎：評論家
10. 棚橋　諒：京大工学部教授
11. 松嶋吉之助：京都市助役
12. 隈野信道：上智大学教授 日本観光学会専任理事
13. 湯浅八郎：ICU名誉教授
14. 京都新聞社説：社長が京都タワーの施主
15. 山田　守：タワーデザイン設計者
16. 浅野　清：大阪市大教授
17. A.B.C.
18. 西沢文隆
19. 白石博三：京都工繊大教授

表-2　シンボル性の種類とシンボルの意味内容

氏名番号	シンボル性の種類とシンボルの意味内容（　）内
13	視覚的シンボル（位置象徴），シンボルの時間的作用様式
11	〃　（新しい京都）
12	シンボルの意味（都市近代化）
13	視覚的シンボル（京都の玄関，新しい京都）
14	〃
15	（新しい美を持つ京都の初期の記念塔）シンボルの時間的作用様式

山田守氏は，〈それ程短かい将来ではないが，いずれ新しい京都の都市美に埋没して〉，京都タワーは京都の象徴とならなくなることを推測している。両氏の意見に見られる〈何年か後には〉と〈それ程短かい将来ではない〉を具体的に何年位のスパンと理解するかは，議論のわかれる点であろう。設計に携わり随分と討議をしたと思われる両氏の捕えかたは，以上のようにくい違っていた。なお山田氏の，京都タワーが〈新しい京都の都市美に埋没して〉しまうということの理解は，文章の前後関係から考えると，高層ビルの間にタワーが埋没してしまうこと，および京都の町全体が高層化し，タワーが目立たなくなり，視覚的にも見えなくなってしまうことなどを意味していると考えたのだが，この点の理解はどうであろうか。

以上過去の事例からの，景観観と景観の意味内容の一抽出方法とその結果について概略した。

1）「戦後における都市景観運動と最近の新たな動向について」昭和49年度学術研究発表会論文集 No.9，都市計画学会

2）ベレルソン「内容分析」社会心理学講座VII，みすず書房 932.1